

出会い(28)

ストロンボリー - 活火山三題 -

奥村 一郎



・ 火山 ストロンボリー

a. 出会い

筆舌にあらわせないというのはこのことだろうか、まさに壮観そのものの火山の夜景は、それから半世紀も過ぎた今になっても、ありありと瞳に浮かんでくる。

大学を卒業してまもなく、といっても、すでに半世紀も前のこと、カルメル会というカトリックの修道院に入るためフランスに旅立った。1カ月近い船旅も、紅海を抜けて地中海に入ると、まもなく、夕暮れのシシリー島を目の前にして、船は静かに通りすぎて行った。当時としては、東洋航海唯一の豪華船を誇る2万4千トンのフランス船マルセイーズ号、その紺碧の海に映える純白の巨体は美しかった。

いつしか日はとっぷりと暮れて、漆黒の夜空に無数の星がダイヤモンドのように輝きはじめた。ゆっくりとした、大きな波を割って進む船首にざわめく音だけが、いっそう静けさをます夜の9時ごろ、船内放送は火山ストロンボリーに近づいたことを知らせた。ひとりタラップを上って広い後甲板に出たとたん、凄まじいまでの美の祭典が眼前にくりひろげられた。闇の夜空を破って燃え上がる深紅の炎が、無数の火の玉になって漆黒の海面に降り落ちてくる光景に目を奪われて、時の経つのを忘れる思いであった。

b. 帰国の途次に

それから10年近いヨーロッパでの修道生活のあと、1959年9月初旬、マルセイユ港から帰国の旅に出た。出発後まもなく、船はまた思い出のストロンボリーの近くにきた。その日は、明るい南イタリアの太陽の光に包まれたさわやかな朝だった。10年前の夜景をなつかしく思い起こしながら、昼間のストロンボリーの風景を甲板の手すりに身を寄せながら眺めていた。海拔1500メートルぐらい、島全体が火山になり、その麓には白壁の家が散在していた。絶え間なく噴火する火口からは、溶岩が真っ黒な液状になって流れ落ち、山肌は草1本も見えぬ黒褐色の溶岩に覆われていた。

・ 桜島

それから帰国後、ある日、鹿児島の子修道院を訪れたとき、著名な活火山桜島を間近に見る機会があった。シスターに案内され

て街並に立ち並ぶ石垣の家の側を通りすぎたとき、その石垣を指しながらシスターが説明してくれた。石垣は桜島が大噴火したときの溶岩が冷えて固まったもので、鋼鉄のように強く、どんな石や岩よりも頑丈なので、皆が好んで建物や石垣の礎石に使っているのだという。そのため、今は市当局の指示で採掘が禁止されている、とか。

「そうですか」と、興味深く、その石垣を見つめ直しながら、かつてのストロンボリーの印象がまた思い浮かんだ。

ふと、そのとき、ストロンボリーの「天上を焼く火山の炎」と「地上を焼き尽くす灼熱の溶岩」、次に桜島の「岩よりも鉄よりも堅固な溶岩」の3つのイメージが思い浮かんだ。というのも、イエス・キリストの福音的愛は天上の炎のようにたとえられ、使徒、とくに聖パウロの愛のことは、まさしく、灼熱の溶岩のように見えた。そして、その後二千年、強靱な西欧的知性によって不落の磐のように固められたカトリック教会の中世のスコラ神学は、桜島の頑丈な、固く、冷えきった溶岩を思わせた。

・ 「愛」と「愛する」 - 「名詞」と「動詞」 -

新約聖書を読んでいて、小さな発見に驚いた。

キリスト教の魂は、いうまでもなく、「愛」である。ところで、不思議なのは、福音書には、「愛」ということば自体、意外に少ないということである。それも、「名詞」としての愛は少なく、「動詞」としての愛が圧倒的に多い。つまり、そこでは、「愛」は何よりも「行動」に重きを置くものであり、具体的行動においてその実質が問われる。「言葉や口先だけではなく、行いと真実をもって互いに愛し合おう」と、ヨハネは記している。(ヨハネ3・18)

つまり、福音書の中では、「愛」ということより、千差万別の行為に受肉する愛の多様化の様相がみごとに展開されている。

一例として、よく知られた「善きサマリヤ人」の譬えをとりあげてみよう。(ルカ10・25-37)

すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか」。イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読ん

奥村 一郎 / おくむら・いちろう

1923年岐阜県生まれ。

48年東京大学法学部政治学科卒業、東京大学文学部宗教学科に再入学。51年卒業と同時に、カリックのカルメル修道会入会のため渡仏。57年、ローマのカルメル会国際神学院で司祭叙階。59年帰国後、仏教とキリスト教の交流分野で活動。79年より2001年までバチカン諸宗教対話評議会顧問神学者。現在、京都聖母学院短大名誉教授。

著書に、『祈り』『断想』『神とあそぶ』(女子パウロ会)、『わたしの心よ、どこに』(サンパウロ)、『聖書深談法の生いたち』(オリエンス宗教研究所)、『祈りの心』(海電社)など多数。

でいるか」と言われると、彼は答えた。「心 を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。また、隣人を自分自身のように愛しなさい」とあります。イエスは言われた。「正しい答だ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる」。

しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。イエスはお答えになった。「ある人がエルサレムからエリコへ下って行く途中、追いはぎに襲われた。追いはぎはその人の服をはぎ取り、殴りつけ、半殺しにしたまま立ち去った。ある祭司がたまたまその道を下って来たが、その人を見ると、道の向こう側を通して行った。同じように、レビ人もその場所にやって来たが、その人を見ると、道の向こう側を通して行った。ところが、旅をしていたサマリア人は、そばに来ると、その人を見て憐れに思い、近寄って傷に油とぶどう酒を注ぎ、包帯をして、自分のろばに寄せ、宿屋に連れて行って介抱した。そして、翌日になると、デナリオン銀貨2枚を取り出し、宿屋の主人に渡して言った。『この人を介抱してください。費用がもっとかかったら、帰りがけに払います』。さてあなたはこの3人の中で、だれが追いはぎに襲われた人の隣人になったと思うか。律法の専門家は言った。「その人を助けた人です」。そこで、イエスは言われた。「行って、あなたも同じようにしなさい」。

この話の中にも、「愛」という名詞はない。前半に「愛しなさい」という動詞が2回出てくるだけ。「善いサマリア人」の本文の中には、「愛」という名詞も、「愛せよ」という動詞も全くない。しかも、善いサマリア人の至れり尽くせりの行動は、「隣人を自分のように愛する」というよりも、「隣人となっていく行動」の溢れを示している。そしてキリストの答は2度とも行動の意志に訴えている。「愛」ということばではなく、「愛の行動」こそが救いとなるということである。

それも、「自己完結」の性格をもつ「信仰」とは異なり、「愛」、さらに言えば、「福音的愛(アガペー)」は「自己所有」の「自己実現」ではなく、「他者」を愛することなしに「自己完成」ができないという逆説の本質をもっている。「他者救済」が「自己救済」となる。他者を愛さないで、自分を愛するということはありません。それが、キリスト教的愛(アガペー)である。

よく知られた、カルカッタの「死を待つ人の家」で、マザーテレサにお会いしたときのことが、今も忘れられない。

「この家にいる人たちの苦しみは、貧しさや、病ではありません。その人たちを大切に思い、愛してくれる人がいないことです」「貧しい人のためではなく、その人たちと共に生き、そして死ぬまで自分を与え尽くすこと」

昨日も今日も、毎日のようにこの世を去っていく人たちを訪ね、その手をしっかりと握りしめながら祈っておられるマザーの後ろ姿には、イエス・キリストの荘厳なまでの福音的愛がにじみ出ている。暗黒の夜空を焼き尽くすような、火山ストロンボリのように。

P.G.I.のお知らせ

・2003年12月3日(水)・2004年1月30日(金)

リンダ・コナー 写真展

「Photographs」

Linda Connor: Photographs

アメリカの女性写真家リンダ・コナーは、自然や古代建築、遺跡、西洋の文明圏ではない地域へと対象を広げ、インドを中心に、カンボジア、タイ、ネパール、チベット、トルコ、ヨルダン、エジプトなどへ出かけ、人々や風景を8×10インチの大型カメラで撮影しています。約60点のオリジナルプリントを展示します。



Bedrock Church, Cappadocia, Turkey,
2002 © Linda Connor

・2月3日(火)・2月27日(金)

香川久士 作品展 「港」・「岩」
Hisashi Kagawa: Port and Rock

・3月4日(木)・4月9日(金)

ジョージ・ロジャー 作品展 「ヒューマニティ」
George Rodger: Humanity

* 年末年始休館 12月20日 - 2004年1月6日

フォト・ギャラリー・インターナショナル

東京都港区芝浦4-12-32 TEL.03-3455-7827 FAX.03-3455-8143

JR田町駅芝浦出口(東口)より徒歩10分

【営業日】月～金 11:00～19:00 【入場無料】

【休館日】土・日・祝日

*P.G.I.についての詳しい情報はホームページをご覧ください。

<http://www.pgi.ac>